海外天文学者の横顔 (1)

マルコヴイッツ博士

高木重次*

マルコヴィッツ博士．後の建築中の建物は，サイモン・ニューコム研究所．1961 年虎尾正久氏撮影．

私がマルコヴイッツさん（以下こういはせて頂く）に会った時は奇妙に水沢の，大げさにいうと，運命の日々であったようだ．最初に会ったのは，1958 年2月，当時は ILS 事業が批判を受け，マルコヴイッツさんも批判者側の一方の旗頭として，大いに論陣をはっていた頃である．それと同時にグリニジ天文台長スペンサー・ジョーンズにより PZT の優位が強く打ち出され，その当時漸く発足したばかりの水沢 PZT の一ノ関への移転（すなわちワシントンと同緯度圏への移転）が彼により要望というより半ば要求されていた．彼は私共にとっては，何ともかたくなな行手に立ちふさがった岩石を感じさせた．その彼が，地球観測年の開始に当り，PZT の活動状態を見に水沢に立ち寄るという．関係方面に異常な緊張を与えたらしい．時には，彼への個人的な攻撃もでたという．今から考えればまったく馬鹿らしい興奮ぶりであった．2月の漸く春の近いことを思わせる南風の静かな朝，東京文台の虎尾さんに案内された緯度観測所の玄関に自動車から降り立った日本人とも見まがう彼の姿に私共の眼は一瞬とまどった．彼のにこやかな笑顔にもよったろうが，急に何とはなしの親しみを感じて，今までの私共の上にのしかかった重苦しさが，春の日中の氷のように，その時以来私の頭から消えて終った．

水沢での一日はまったくなごやかに，水沢の PZT をほめてくれたり，ワシントンでの PZT 観測整理方法を紹介してくれたり，そして最後に水沢の PZT の観測精度については，大体ワシントンのものと同じで，“大変結構です”と満足の様子だった．しかし服部さんは大変不服のようだったが．この時強く印象に残ったのは，私の苦心した水沢の PZT 整理方法を“数学的”と一言で片付けたり，観測誤差の判定にもあまりにも雑なと思われる計算方法をして見せたりしたことだった．実はこのような考え方が彼の学問的な研究の指導原理となっていたことが，後で次第にはっきりしてきたのであるが，“アメリカ人は大ざっぱだ”，今から考えると面はゆいことをその時は考えた．

“よいやつ”と彼に会った人はみなそういう．その一言でわかるような，さばさばした暖い印象をわれわれに残して，また一関問題にも心を残しながら，そそくさと雪の水沢を離れていった．それと同時に水沢としては，その後十年近くも飛躍の機会をいろいろな人の思惑の中に失って終った．

私がつぎに氏に会ったのは，これもまた雪のワシントンでであった．夕ぐれた雪木立を走るハイウエイが印象的なボルティモア飛行場からワシントンへのバスは数年前のマルコヴイッツさんの笑顔を想ひ浮べながら，まだ日本をたち切れないでいた私を，雪のふりしいた街なみの異国という感情にほうりこんでくれた．二世のタクシーが漸くマルコヴイッツさんの官舎へ運んでくれた時，マルコヴイッツさんは小型のラジオをかかえて，当時流行のムード音楽の流れの中にゆったりと寛いでいた．これが氏との第二回目の出会いであった．それから数回氏の家に呼ばれたが，マルコヴイッツさんはいつもラジオのスピーカーから流れでるムード音楽の中で，新聞をみたり，思いだしたように早口で話をした．マルコヴイッツさんは自分自身のことのみを非常な早口で私の耳に流しこんだ．こんな彼に，私はつき離した親しみを感じた．あまりにもワン・マンぶりが見事だったからかも知れない．この感じはマルコヴイッツさんの天文台での仕事ぶりでもはっきり印象づけられた．口からいつもでる言葉は“研究”であり“仕事”であった．下の人たちには否も応もないのである．マルコヴイッツさんの学問研究における単刀直入さ，それはドグマテイックとさえいえそうである．マルコヴイッツさんの異状なまでの自分の仕事への執心と自信，これあればこそ彼独得の学問研究の哲学がうまれたのであろう．私共は，マルコヴイ

* 水沢緯度観測所

ッツさんの研究に含まれるよさ，すなわち創造的とはいえないかもしれないが，事の本質をみぬく独創性をそのあまりにも簡明さの中に見落してはならないと思う．マルコヴィッツさんの制限緯度の考えから緯度の永年変化の研究えの思想の流れ，また暦表時の単位をマルコヴィッツカメラから決定する実証的研究は，この簡明さの故にわれわれを否応なしに圧倒する．しかし，膨大なデータを集めながら決定的な結論がまだ程遠い感じを与えるのは，マルコヴィッツさんの米国人としての体質的なものによるのではないだらうか．米国で産れたプラグマティズムの思想もその実際的な平明さにもかかわらず完全には米国人の行動を律することはできなかった．また米国人が一番学問の都として愛する，美しい静かな落ち着いたワシントンも一カ月余の滞在の後に私に残されたものは人工的なものの空しさであった．ここで私はマルコヴィッツさんの研究の奥行きを語りたいのではなく，彼の美しい簡明さをもつ思想の限界をさぐって見たかったのである．

彼の毎日は多忙の一字につきる．一日中，タイピストにメッセージを口述する．タイプを打ち上げる間，レコーダーに吹き込む．このくり返しが隣りの部屋からドアー越しに数日聞えた．それから，数日後，ニューヨークでの時計学界で講演するために空港へ急いでいる．春のロンドンでの EIC の会へ出席するための手続きを電話でやっている．数人の人と時どか報時の話を大声でしゃべりまくっている．写真をとるために，PZT の室へ行く，月刊誌の取材記者とのインタービューだったという．新しい長波受信機をとりつけに技師がきて彼はそれに毎日つきあう．PZT が故障する．自分の部屋に部品を運んできて，いぢっている．ただただめまぐるしい．しかし，一日の終りには，必ず各部屋をまわり PZT をみてから帰る．米国いな世界のタイムの中心としての自負と責任感かも知れない．

彼に会った人には，彼の精力的な冷たい活動ぶりがあまりにも眼につきすぎるようである．ある日のこと，私が計算に夢中になって帰りが遅くなった．隣りの部屋から話声が聞えてくる．どうも新しく入った月給の安い人を夜学か何かに入れて上級の資格を取らせる話らしかった．それを相談役のホール博士としているらしい．彼の忙しさの別の一面をみせられたようで，私も自分が親切にされたこととあわせて，“よいやつ”の別の裏づけになった．

ワシントン天文台の冬は雪が高い木立の間をふきぬけて行く．丁度その風道に冬がしみついたようなうすたいしや色のホールが立っている．今日は映画があるという．何の映画かわからないが，マルコヴィッツさんのいたづらつぽい眼つきに，何となしにひかれてホールの中に入った．天文台の人が100人近く集っており立見である．先年できた，ニユーカム記念研究所の建設記念の映画で日本でいう地鎮祭から竣工までの映画である．マルコヴィッツさんの研究室が画面にあらわれる．マルコヴィッツさんの大写し．みんなが拍手して笑う．相変らず忙しい彼の演技が梱包を解くハンマー，器械を組立てるドライバーに躍る．にやにやしながらみていた私の腕をぎゆっとつかまえる人がいる．はっとしてみると，マルコヴィッツさんの顔が笑っている．“すばらしい”．私の思わずだした声が，すっかり晴れた青色の空へ，枯木立の中を一吹き吹き過ぎた風と共に消えた．

当時私の頭の中は，原子時計の水沢導入がこびりついていた．マルコヴィッツさんに相談すると，近く東京の電波研に入るからそれを利用したらよいという．ルビヂユウム時計はと聞くと，広告は信用できるものではない．アトミクロンの実績を尊重すべきだと繰返した．彼の実際家としての慎重さが私の頭にうえつけられた．サルザー時計があるのに，彼はこうもいった．それでも数日後，バリアン会社のルビヂユウム時計の発表会へつれていってくれた．カクテルパーティーと軽い昼食．その後で会社の技師が製品の優秀さを長々と説明する．マルコヴィッツさん一人が手をあげて時計の運行の不備な点を何回も何回もつく．技師もとうとう笑いながらうなづいて見せる．彼もまた笑う．帰りみちでぽっんと私にいった．“ゲイシャ・ダンスはないよ”．

私はこの文の始めに水沢の運命の日々と書いた．私のワシントン滞在中に服部さんがなくなられた．中央局の仕事はマルコヴィッツさんは水沢で続けることを強く期待をしていたらしい．いくらでも協力してあげるからと池田さんにいってやってくれと何度もいってくれた．そして君達でやって行けるねと何度も念をおした．彼の水沢への期待は，何んであったかは充分わかるのであるが，服部さんの遺志はもっともっと高い所にあった筈である．私はその願いをこめて，“われわれの行く手をてらせ”と亡き服部さんをしのびながら弔電をうった．

マルコヴィッツさんのぐっと引きしまった顔．その日は雪がやんで北風の寒い薄ぐもりの日であった．研究室の真向いの自然林に包まれた雪の岡を背にして，アンテナをはっていた人夫のかすんだ姿と共に，今でも私の眼の底にありありと焼きついていて離れない．